

発行

北海道ポーランド文化協会
〒006-0006

札幌市手稲区西宮の沢6条
1丁目16-1-210 佐光方

電話・FAX 011-215-6696

samitsu0204@gmail.com

http://hokkaido-poland.com/

POLE

第83号 2014.9.15

北海道ポーランド文化協会会誌

創立から四半世紀
刻んだ足跡に
「文化功労賞」



総会&懇親会に お越しく下さい!

日時 2014年10月31日(金) 18:30～ 総会 / 19:30～ 懇親会(参加費 3,000円)

会場 北海道大学クラーク会館 3F 国際文化交流活動室
(札幌市北区北8西7)

お問い合わせ 事務局・佐光まで(Tel/e-mail:左上を参照)

- ※ 同封ハガキに参加人数を記入し、ご投函ください。
- ※ 懇親会では、お子様を含めご家族、お友達の参加を歓迎します。お問い合わせでお越しく下さい。
- ※ 会場内では「年会費の納入」もできます。



パフォーマンスがとびだすことも…。ビールもあります! 持ち込み歓迎。

写真は過去の総会・懇親会風景
北大クラーク会館3階
国際文化交流活動室にて

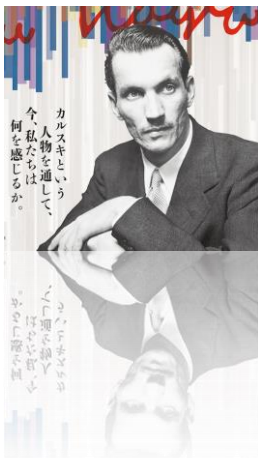


《第70回例会》ヤン・カルスキ生誕100周年記念展示会

「私はホロコーストを見た」 in 札幌



第二次大戦中に自ら目撃したナチスによる犯罪、ホロコーストを世界に語り続けたポーランドの偉人ヤン・カルスキの生誕100周年を記念して、彼の生涯を数々の写真を通して振り返るヤン・カルスキ展「私はホロコーストを見たーヤン・カルスキの黙殺された証言」を札幌でも開催します。



《入場無料》

日時：10月27日(月)
～11月9日(日)
(月曜～土曜)8時45分～22時
初日27日(月)は12時開場
(日曜・祝日)8時45分～20時
最終日9日(日)は16時終了
場所：札幌エルプラザ 2F交流広場
(北区北8西3、JR札幌駅北口
地下歩道12番出口直結)
内容：ポスター(写真と解説)など

※ 東京での催しを含めて、詳細は同封のフライヤーとHPをご参照
<http://instytut-polski.org/event/4872/>

--- 関連書籍紹介 ---

カルスキ自身による証言

「私はホロコーストを見た 黙殺された世紀の証言 1939-43」ヤン・カルスキ著

記録文学の傑作、本邦初訳。
誠意と勇気。個人の冒険がそのまま世界の運命につながっている。どうしてこれがフィクションでないのだ？(池澤夏樹氏推薦)
吉田恒雄訳 四六判 白水社刊 2012年
上・下 定価各 3,024円



フランス人著者がカルスキの苦悩について書いた

「ユダヤ人大虐殺の証人ヤン・カルスキ」

ヤニック・エネル著
ユダヤ人大虐殺の証人として映画『シオア』にも登場したカルスキの苦悩、「人類の怠慢、無知、無関心が悲劇を生んだのだ」という悲痛な叫びを独創的手法で描く。
飛幡祐規訳 四六判 河出書房新社刊 2011年
定価 2,376円



ヤン・カルスキ (1914-2000)

大学を優秀な成績で卒業し外交官になったが、まもなく第二次大戦が勃発し、捕虜となるも脱走、並外れた語学力と記憶力によってポーランド地下国家の政治密使の任務を託される。ワルシャワ・ゲットーや強制収容所に潜入、ナチスによるユダヤ人大虐殺の事実を世界に伝えるため、1942-43年、イーデン英外相やルーズヴェルト米大統領に面会し、ホロコーストについて最初期の証言をしたが、黙殺された。1944年に米国で刊行された著書は大ベストセラーとなり、後に多くの外国語に翻訳された(『私はホロコーストを見た』白水社、2012など)。

戦後は米国に亡命、ジョージタウン大学で40年にわたり国際関係論と共産主義理論の講義を行った。彼の学生の中に、後に大統領となるビル・クリントンがいた。生涯の最後の20年間、彼は世界各国で、戦争中のユダヤ民族大量虐殺について、この悲劇に対する全世界の関心をかき立てようとした自らの試みについて、繰り返し語った。

彼は数多くの権威ある賞を受けている。「諸民族のなかの正義の人」の称号や、ポーランド内外8つの大学の名誉博士号、ポーランド最高の国家勲章・白鷺勲章を授けられ、2012年にオバマ大統領は大統領自由勲章を授けた。ポーランド共和国下院は2014年を「ヤン・カルスキ年」とする決議を行った。

はじめての東京例会 大成功！

樺太時代に生きたポーランド人

～彼らはどこから来て、
いかに生き、どこへ帰ったのか～

尾形 芳秀



日本とポーランドの間には過去数々の交流の歴史があり、それが今日まで受け継がれ発展していることはよく知られている。そこに共通するのは、人間としての心の絆であろう。しかし、その経緯には、何か欠落があるようにも感じられる。私は、それは樺太時代に日本人と共生したポーランド人のことではないかと思う。単にポーランド人のことだけではなく、日本史のなかで、樺太時代のことは欠落部分だと思われる。

樺太時代のポーランド人のことが知られていないのは、それ以前、この島は帝政ロシア領で、そこに残留していた人々は日本の敵国ロシア人と看做されていたことや、この島はシベリアに次ぐ流刑の島だったことにも起因している。この島にいたポーランド人は、多くが政治犯だった流刑囚だけではなく、ロシア軍の傭兵や各ポスト(監視所)の監視人もおり、これらの人々は母国が分割統治されていた時代に、生きるための止むを得ない選択肢だった。

この報告は、日露戦争後に日本領樺太に残留を希望したポーランドの人々と、ロシア革命後に北サハリンから亡命した人々が、異国の地で如何に生きたかを調べたものである。

樺太史のなかで、これまでこのテーマで発表されたものは、断片的なものだけで、全体像は見られない。近年発行された『日本・ポーランド関係史』(エヴァ・パワシュニルトコフスカ、アンジェイ・T・ロメル共著、彩流社、2009)という 300 ページ超の大著にも、樺太時代のポーランド人についての記述はたった一行半しかない。日本にもポーランドにも資料がないためだろう。

この調査は、文字通りゼロからのスタートであった。断片的な資料や手記から調べ始め、当時の彼らを知る人々に聞き取り調査を行い、彼らの消息を探し、彼らに対してオーラル・ヒストリーを試みて、漸く発表することが可能となった。全体像が判明してからもう 10 年以上も経過したが、この間も検証を続け、発表の機会をうかがっていた。彼らがポーランドだけでなくヨーロッパ各地で立派に社会に貢献していたこともあり、発表を控えていたのである。

ここには彼らから提供いただいた貴重な写真がある。この一枚一枚から、彼らの思いを感じとっていた

おがた よしひで

1937年、樺太・豊原市生まれ。豊原にはロシア風の丸太小屋が点在し、ポーランド人家族も住んでいた。戦後まで豊原で過ごし、ポーランド人と同じ地区に住み、遊び、同じ学校で学んだ。最近、郷土史家として樺太に関心をもち、樺太豊原会機関誌『鈴谷』(すずや)の編集に携わってきた。

だきたい。第二次世界大戦後の混乱のなかでこれだけの写真を持ち帰ったのは、稀有なことといえる。彼らと共通の思いは、彼らもまた祖父母の足跡を辿っているということだ。ともに樺太時代の戦前・戦後を体験した者として、彼らの生きざまには教えられるところが多かった。今こそその歴史の空白を埋めたいと思う。

1. サハリン島時代(1875-1905)から樺太時代(1905-45)へ

この島は、1875年までは北方少数民族や樺太アイヌが自然豊かに暮らす島で、同時に日ロ混住の地でもあった。それが1875年の樺太・千島交換条約によりロシア領となってからは、シベリアに次ぐ流刑地となり、帝政ロシアが統治する多くの国々の人々が流刑になってきた。多くは独立のために蜂起した人々や、それに影響を与えた人々だった。この島に来たのは、シベリアよりは罪状が軽微で、主に島の開発を目的とした流刑囚だった。



写真1 リュボウエツキ家の結婚式に集まった樺太のポーランド人たち、豊原の天守公会堂、1925年頃

2. ポーランド人流刑囚の動向

1875年以降、サハリン島南部でも流刑の受け入れ準備が進められ、1880年頃からコルサコフ監獄への収監が始まった。この監獄にはロシア人のほか、ポーランドなどロシアに統治されていた国々の人々も送られてきた。悪名高いコルサコフ監獄では、劣悪な環境のなかで囚人たちが強制労働に従事させられ、体力の劣る者に鞭打ちなどの体罰が続けられていた。

この状況を冷静に見て、同胞を何とかこの境遇から救出しようと、原始の森の開拓に志願する計画を実行したのが、元ポーランド軍騎兵でワルシャワ県出身のフランツ・チェハンスキ(Franz Ciechański)である。彼の行動のおかげでサハリン時代や樺太時代に同胞は生き延びることができた。彼は、監獄に収容されている同胞のなかから、開拓に耐えられそうな者や特技のある者を15名ほど選抜し監獄を離れる。彼の功績は、不毛の地ノヴォ・アレクサンドロフスクにポーランド人の集落「ワルシャワ村」を造り、小さなカトリック教会を建てたことである。彼は本国から妻を呼び寄せ、たくさん子供を育て、同胞に娘たちを嫁がせた。

3. 予期せぬ日露戦争

1905年、この地にも日露戦争が及び、島の流刑囚に大きなインパクトを与えた。当時この島では刑期を終えても解放されることはなかったが、日本軍の侵攻により、この島の流刑制度は一举に解体され、流刑囚だった人々は解放された。とはいっても、大半は沿海州のデカストリへ強制送還されるはずだった。

日露の戦後協定ではこの島の人々は希望すれば残留も可能とされたが、実状は、コルサコフ以北の集落は焼き払われており、残留するにも家もなく食料も皆無の状態だった。この最悪の状態で、多くのポーランド人にも強制送還の恐れがあったが、彼らはチェハンスキの機転で今まで通りの生活が約束されたのである。彼は同胞に対し、この戦争ではロシアの傭兵とならず、日露どちらにも加担しないよう、適切に指示したことにより、同胞を二度も守ったのである。彼らはロシア軍の降伏後、日本軍に物資の輸送等で協力し、それが日本軍から評価されたのである。

大半のロシア人の強制送還が終わったころ、チェハンスキは後継のリーダーにユゼフ・ジェヴスキ(Józef Rzewuski)を指名する。この男はミンスク郊外のシュラフタの出身で、コルサコフに流刑になると、すぐにチェハンスキのいるノヴォ・アレクサンドロフスクに単身で入植し、丸太小屋を自力で造り始め、何年もかけて大きな家にした。日露戦争の前に結婚し、ウラジミロフカ(後の豊原)に移住し、日露戦争の南部戦線の目撃者となった。日本領となったころ、彼は樺太庁の先

遣隊の住まいの向かいに住んでいた。間もなくこの地の南側に樺太庁の新首都が建設される。

1907年、樺太庁発足のとき樺太の残留ロシア人を調査した記録によれば、強制送還後の残留者は91名、うちポーランド人は32名、ロシア人は37名、他の22名は7カ国に及んでいた。正式な残留者はポーランド人だけで、他は強制送還時に山野に隠れて出頭しなかった人々とみられる。

ジェヴスキは教会をノヴォ・アレクサンドロフスク(後の小沼)から首都となった豊原に移転新築し、この教会(天守公会堂)は、樺太時代のポーランド人たちの拠り所となり、子供たちの母国語教育の場として利用され、何度か建て替えて大きな教会になった。彼はこの教会の後援会長的な存在で、大家族でありながら私財を投げ打って拡充に尽力した。彼は、樺太の学校で外国人の受け入れが可能となったとき、率先してポーランド人の子供たちを学ばせた先駆者でもあった。また彼は後から入植してきた日本人に、北方圏の牧場経営の手法や屠殺の技術を伝授した。



写真 2 豊原高等女学校に学んだポーランド人フランシユカ・ジェヴスカ(愛称フラーニャ：左端)、1930年

4. 「樺太波蘭人会」の設立

1905年当時、彼らはポーランド人と正しく認識されていたが、1930年頃には、樺太在住の残留人は全てロシア人とか白系ロシア人とか呼ばれていた。これは、ロシア(ソ連)と国境を接する島であったことから、ロシアのスパイが何度も南へ潜入し、国境を挟んで小競り合いが続いていたため、主にロシアからのスパイを警戒した官憲が、島民に警戒させるためにとった措置であり、在樺のポーランド人にとっては苦悩の日々となった。彼らの子供たちは日本の学校で学んでいるのに、このような差別を受けるのは決して容認できないことだった。危害が加えられることはなかったが、「ロシア人」と呼ばれるのは耐えられないことだった。

特に一度に38名ものソ連のスパイが日本の官憲に逮捕された事件以降、スパイの潜入先は残留ロシア人宅と注意喚起がなされ、在樺の外国人は不自由な

生活を余儀なくされた。

そこでポーランド人たちはロシア人との差別化を図るため「樺太波蘭人会」を作ることにした。1937年、在樺のポーランド人たちは二代目リーダーのジェヴスキ宅に集まり協議し、投票の結果、白浦に住む亡命ポーランド人アダム・ムロチコフスキ(Adam Mroczkowski)を会長に選出し、警察署に会の設立届けを提出する。これまでリーダーは任意に継承されてきたが、このとき初めて選挙で選出された。彼は亡命後から同胞や地元民の信頼の厚い人物だった。このようなコミュニティを作ったのはポーランド人がはじめてだったので、この会の発足は日本の官憲を刺激した。

1941年末、太平洋戦争が勃発し、官憲の警戒はさらに厳しくなった。日露戦争では何かと貢献したにもかかわらず、いつの間にか「ロシア人」と呼ばれることは、彼らにとって予想外のことだった。

この時期、どこで戦争の気配を察知したのか、密かに樺太を離れるロシア人がいた。日本の治安当局は、厳しい監視とは裏腹に、情報収集は未熟だった。官憲は、樺太のロシア系外国人の全てを「米国の攻撃から守るため」と称して、豊原市の南東部にある上喜美内地区に秘密裡に隔離する。当時ほとんどの島民はこの事実を知らなかった。ソ連軍は侵攻すると、逸早くこの地区に入り隔離された人々を解放した。

5. 二度目の解放

ポーランド人たちは僅か40年間の樺太時代に、日本とソ連に二度も解放されるというめまぐるしい体験をすることになった。1945年、ソ連軍が島の南部を制圧すると、日本軍や官憲を取り調べる際の通訳として、残留ポーランド人を徴用する。彼らの多くはポーランド語よりもロシア語をよく話し、しかも日本の教育を受



写真 3 豊原旧市街のジェヴスキ家の結婚式、(前列左端) 二代目リーダー・ユゼフ・ジェヴスキ(新郎ウィクトルの父)、(後列左端) 三代目リーダー・アダム・ムロチコフスキ

けていて日本語も正確だった。残留ロシア人や朝鮮人は、日本語は片言程度だった。

彼らは3年ほどソ連軍や民生局に徴用された。この間、日本人の軍属や治安当局の尋問に通訳として立ち会いながらも、いつ日本人と同じ運命を辿るか、不安な日々だったという。彼らは長い年月ロシアに統治されていた経験から、ロシア人の行動を決して信用していなかった。案の定、通訳の仕事が一段落すると、ムロチコフスキは、亡命ポーランド人であり、またポーランド人会の会長だったことから、ソ連官憲の取り調べを受けるが、彼の知恵でなんとか解放される。

1948年、この地に流刑になって半世紀振りに、ポーランド人たちはようやく帰国の途についた。しかし、母国に帰国したのは全員ではなかった。ロシア人や日本人と結婚していたり、家族の無事帰国を願ったりしてソ連に残留する者もいた。ドイツ人や亡命ロシア人と結婚した者は、ヨーロッパや米国へ旅立った。

はじめての東京例会「樺太時代に生きたポーランド人」は2014年6月28日(土)午後2時から駐日ポーランド共和国大使館で開催され、55名が参加しました。会場をご提供くださったポーランド広報文化センターはじめ、多くの方々のご支援、ご協力に心から感謝します。



写真(左) 前列中央: 尾形講師、ヴァチンスキ氏 <尾形孝二氏提供> (右) 講演風景 <西島國昭氏提供>

朗読会に出席して

～ 巡り合わせ ～

佐藤 宣子

「午後のポエジア」は2014年6月14日(土)午後2時から北海道大学クラーク会館3階国際文化交流活動室で開催され、過去最多の83名の参加がありました。ポーランド広報文化センターはじめ、たくさんのご支援、ご協力に、心から感謝します。



◆ 齋田 道子 「消えた国 追われた人々」より



◆ 氏間多伊子 「外郎売」口上から



◆ シャレック・レナタ 「ムロジェックの名句」



♪ リリアナ・コヴァルスカ、河村恵李アンナ、河村明希カリナ
「お願い」

千代麿さん、暁子さんのお誘いで「午後のポエジア」に出席させてもらった。冒頭の朗読でいきなりポーランドの大地に引き込まれた。秋のポーランドを3度訪ねているのでヴィスワ川を中心とした情景が迫る。古く趣深い建物はもちろん鶏の放し飼い、収穫したばかりの赤ビートを満載したトラック、石炭を積んだ荷馬車、真っ赤な実をつけたリンゴ畑などわくわくする風景である。

ふと現実に戻ると「外郎売」の口上が滔々とよどみがなく上手い。3人のお嬢さんの愛らしい登場。そして1955年、世界青年友好祭で使われた歌を持ち帰って日本の歌詞をつけたという「森へ行きましょう」など本格的な歌唱。お父さん相手に少年ヤシュ君のジョーク。お一人ずつの熱演。最後は千代麿氏自作の書道俳句そして吟詠『陽炎や万羽はばたくヴィスワ川』、ヴィスワ川に始まりヴィスワ川の締め。「浜辺のうた」を篠笛が静かに奏でてお開き。

その後の懇親会は「ポロネーズを踊ろう」ということで私も仲間入り。手作りのケーキにお茶、ワインまであり心のコもったおもてなしで、またまた私はポーランドのあのときの感動を蘇らせた。それは17年前、ウッジ市のポ・日友好交流会の席上皆でポロネーズを踊り、女性たちが「浜千鳥」などを美しい日本語で合唱してくださった。お返しに私たちは「シュワ・ジェヴェチカ」(森へ行きましょう)を唱った。まさきに子供達が笑顔になり喜んで手をのべてきて、大人も立ち上がり輪になり「シュワ・ジェヴェチカ」の大合唱となった。少なくとも私はおぼつかない唱いかただったと思われるがとにかく大いに盛り上がった感激は今も忘れられない。17年前の旅は谷本一之氏が団長を務めご一緒させていただいた。谷本氏は鬼籍に入られたが他の方々に今日お会いでき巡り合わせに感謝です。

そして世界が平和でありますように。

さとう・のぶこ(俳誌「夏至」編集長)



♪ 安藤むつみ&ミハウ・マズル 「森へ行きましょう」、「今夜は帰れない」



◆ 長屋のり子 「自作詩」から



♪ 端唄・三味線花季会社中 (三味線演奏)
「黒田節」、「祇園小唄」他



◆ ミコワイ&ラファウ・ジエブカ 「ヤシュ君のジョークに見えるポーランド人の性格」



◆ 尾形 芳秀&シルヴィア=マリア・オレヤージュ
「サハリン写真物語」



◆ マズル・ミハウ
「ポーランド語の発音を詩で練習しましょう」



♪ 栗原朋友子 (ウクレレ演奏及び司会担当)



◆ 小笠原 正明 「私のポーランド」より



◆ 小林 暁子 「ソネット」



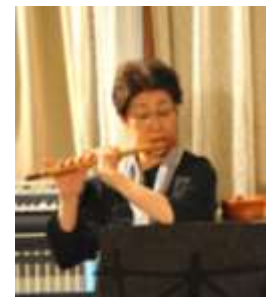
◆ 霜田千代麿 (書道俳句)「ポーランド ろっく」



♪ 在北海道ポーランド人舞踊団「ポロネーズを踊ろう」



展示コーナー



♪ 福原 光篠 (篠笛演奏)



出演者のカーテンコール



懇親会風景

<写真提供>尾形芳秀



シリーズ
《北海道のポーランド人から》

誓います / Przysięgam

～日本とポーランドの結婚式について～ (1)



アグニェシュカ・ポヒワ

9月15日に結婚1年記念日を迎えました。結婚式の準備とその当日の思い出がまだフレッシュである一方、一年という間をおくと少し客観的に考えることができるようになった気がします。それがきっかけで、今回日本とポーランドにおける結婚式をさまざまな面から比べてみようと思いました。

長年日本に住んでいる私ですが、日本人の相手と結婚することになったので、やはり結婚式をあげるとしたら日本であげるのではと、予想していました。結婚式は、日本とポーランドという二つの違う世界がぶつかるテンションの高いイベントですから、どのように私たち二人の個性と私たちが代表する国の個性を上手に表せるのかが最大の課題とチャレンジとなりました。

そもそも日本とポーランドでは結婚はどのようにできるのか？結婚の準備はどこがポイントなのか？結婚式の当日の流れはどう違うのか？また両国の伝統的な結婚式は現在どう変わっているのか？という質問に答えてみたいと思います。

日本とポーランドにおける婚姻の違い

まずは、両国の法律から見た、婚姻が成立する場合を簡単にまとめましょう。

日本では役所で事前に記入した婚姻届を提出することで法律上、夫婦が認められます。好きな時に記入し、一人でも好きな時に提出できるという非常に便利で簡単な(外国人の場合を除いて)手続きですが、その一方、重要度の割には、ただ紙を渡して済むという、思い出にもならない、感情のこもっていない手続きでもあるという意見を外国人からよく聞くことがあります。

ではポーランドの場合はどうでしょうか？

日本より手続きが複雑ですが、次のようにお祝いすることになります。書類を渡すだけでは結婚はできず、シヴィル・ウェディングという式が必要となります。これ



Agnieszka Pochyla

1983年ポーランド・シロンスク県ヤストシェンビェ・ズドレイ(Jastrzębie-Zdrój)生まれ。ポズナニ大学新言語学部卒(日本学修士)。日本政府奨学金を受け北海道大学に2回留学した。現在フリーカメラマンとして活動中。



は簡単に言うと、宗教的な要素を抜いた結婚式です。普通は市役所に付属する登記所の結婚会場で行われます。家族と友達が集まり、新郎新婦が役員の前で誓いの言葉を交わし、証人と一緒に書類にサインをし、最後に役員が結婚を認めます。

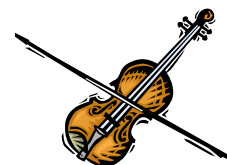
以前は役所で小規模なシヴィル・ウェディングを済ませ、教会で立派なウェディングを行うというパターンが一般だったのですが、1998年から法律の改正によりコンコルダート・ウェディングという混合結婚式が可能になりました。教会の挙式が始まる直前に、役所からもらった書類に新郎新婦、その証人と神父がサインします。法律上も宗教上も結婚が認められ、さらに一回で済ませるので、今はコンコルダート・ウェディングが広く行われています。

また、最近では無宗教、経済上の理由などでシヴィル・ウェディングのみを選ぶカップルが増えてきています。(つづく)

連載《都市の伝説》トルン 2



いかにだし 筏師と蛙たち



昔々、洪水が起こってトルンの町に蛙の大群が流れ着きました。町のいたるところ、蛙であふれました。街の通りにも、民家の中にも、旅籠(はたご)の中にも、市庁舎の大広間の中にも蛙がいました。町の住民、商店主たちは憤懣(ふんまん)やるかたなしです。町の中は住みにくくなりました。市民は、市長が責任を取るべきだ、と考えました。苛立(いらだ)った市長は、忌まわしい蛙たちを始末するように、全市民に命じました。しかし、残念ながら、蛙は人々の手に負えませんでした。

そこで、市長は布告を出しました。

「我々の町を蛙から解放してくれる者は、英雄となる。その者に余は余の娘を妻として与え、かつ莫大な財産を与える」

多くの志願者が現れましたが、蛙を始末することができた者は一人もいませんでした。

ある日、町に筏師のマテウシュが筏に乗ってやってきました。たいへん貧しい男でしたが、かねてから市長の娘のマルタにぞっこん惚れていました。

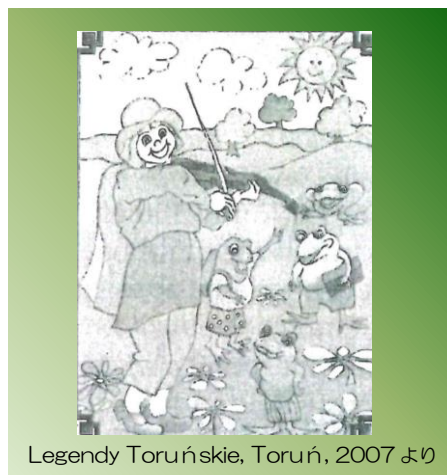
「わたしが町を蛙から解放してみせます！」と彼は約束しました。

みんなは筏師を馬鹿にして笑いました。彼を信用していなかったのです。筏師は旧市街の広場に出て、バイオリンを弾きはじめました。素晴らしい演奏でした。「この若者のバイオリン演奏はじつに見事なものだ！」



Pomnik flisaka

トルンの旧市街にある筏師の像



Legendy Toruńskie, Toruń, 2007 より

聴いていて何と楽しいことか！」人々は感嘆の声を上げました。

蛙たちもマテウシュの奏でるメロディーにたちまち魅せられてしまいました。蛙たちは彼の周りに集まってきました。若者は最後の一匹の蛙が、ゲロゲロ鳴いている仲間の群れに加わるまでバイオリンを弾きつづけました。そこで筏師は、ゆっくりとヘウム門の方向へ動きはじめ、門を抜けて町の外にある沼まで来て、やっと止まりました。そこは蛙たちの理想郷でした。音楽は鳴り止みましたが、蛙たちはその沼にとどまりました。「あの筏師は素晴らしいことをやってのけたものだ！ 良い考えを思いついたものだなあ。何よりもありがたいのは、われわれが忌まわしい蛙どもから解放されたことだ」市民は称賛を惜しみませんでした。

「余は喜んで約束を一刻も早く果たそう。筏師に褒美をつかわし、娘のマルタを与えよう」と市長は言いました。

婚礼の祝いは七日七夜続きました。マルタとマテウシュは末永く幸せに暮らしました。二人のあいだに七人の子供ができました。

* * *

トルンはヴィスワ川によるグダンスクまでの丸太浮送ルートの拠点で、筏師たちの休憩場所として知られました。旧市街の聖ヤン(ヨハネ)大聖堂の時計は中心街の方角ではなくヴィスワ川の方を向いて、筏師たちに時を知らせました。町を蛙の災害から救った筏師の名は、イヴォとも言われます。

栗原 成郎(東京大学名誉教授)



晩年のヤルゼルスキ (2004)

社会主義時代の最後の独裁者

ヤルゼル

ギリシア悲劇の登場人物の

今年5月25日、社会主義時代の最後の独裁者ヤルゼルスキが亡くなった。享年90。ポーランド現代史において毀誉褒貶の的となる、あるいは極端な感情を引き起こすという点でヤルゼルスキの右に出る者はいないだろう。それは墓場まで追いかけてきた。有名人が葬られるポヴォンスキ墓地の軍人用の一角に葬られたが、それを許すべきかどうかで国が大揺れに揺れた。デモ隊は葬儀の席だけではなく、墓地にまで押しかけた。埋葬後も死者に辱めが加えられないよう、しばらく衛兵が立つことになった。

ヤルゼルスキは二つの大きな功績で知られている。一つはいうまでもなく1981年に戒厳令を実施したことである。もう一つは1989年に民主化を実施し、今日の政治体制の基礎を作ったことである。

戒厳令はまるでドイツ人がやったかのように徹底したものだった。『連帯』労組の活動家は一網打尽となり、収容所に入れられた。抵抗は容赦なく打破された。ヤルゼルスキはほぼすべてについて陣頭指揮を執った。独裁者は数多いけれども、このときのヤルゼルスキほど独裁的であったのは少ないだろう。そのような強権政治が7年間も続いた。そのときに弾圧された人々の、ヤルゼルスキへの怨恨は、ごく少数者を除き、根深いものとなった。

しかし、すべての人々が戒厳令を恨んだわけではない。世論調査によると、国民のヤルゼルスキへの信頼度は1987年7月に82%、11月に73%であった。これは戒厳令への支持と見てよいだろう。民主化後もそれは大きく変わらなかった。戒厳令は正しかったとする者が2001年に51%、2011年に44%もいた。ヤルゼルスキの死の報に接してインターネットに寄せられた意見の中には、もし戒厳令がなかったなら、ポーランドは今日のウクライナのようになっていただろうというのがあった。

民主化のきっかけをなした円卓会議を提唱したのは、他でもなくヤルゼルスキだった。共産党(統一労働者党)中央委員会で、自らの地位を賭けて『連帯』

労組の合法化のための弁を奮った。1989年6月の最初の(部分的)自由選挙にはむしろ自信をもって臨んだ。なぜなら世論調査では支持率が高かったからである。しかし、あに囚らんや実際の選挙では共産党とその同盟政党は大敗を喫してしまった。ヤルゼルスキは事前の約束に基づいて新設の大統領の地位に就いた。自分に与えられた権限はほとんど行使せず、『連帯』政府に対して大いに協力的であった。しかし、野心に燃えたワレサから退陣要求が出ると、辞任するのではなく「任期を短縮する」という法律を作らせて、さっと身を引いた。

ヤルゼルスキは現代ポーランドの矛盾を一身のうちに体現していた。地主貴族の家に生まれ、カトリックの寄宿学校で教育を受け、家族とともに避難したリトアニアでソ連軍に捕まり、そのままシベリアに流刑となった。シベリアでは重労働で雪目を患い、父親を亡くした。ソ連内で形成されつつあったロンドン亡命政府軍(アンデルス軍)に応募しようとしたが間に合わず、仕方なしに親ソ派の軍隊に応募した。皮肉なものである。これがヤルゼルスキの運命を180度変えることになった。激しい戦闘で何度も傷つき、命を落としそうになりながら、ベルリンまで行軍した。その中で多くの輝かしい軍功を挙げた。

ソ連滞在中にヤルゼルスキはロシア人が好きになり、また共産主義を受け入れて、帰国後に共産党に入党した。無神論者となり、左翼としての強い自覚をもった。

農地改革にはもちろん賛成だった。かつての領地を訪れても、自分たちの住んでいた豪邸が廃墟となり、召使いたちが立派な家に住んでいるのを見て、これでよいのだ、これが進歩というものだと考えた。

このようにヤルゼルスキは相反するものを自分の中に同時に抱えこんだ。良きにつけ悪きにつけ自分の運命と思われたものをしっかりと受けとめ、ためらわずに進んだ。その生き方には、ギリシア悲劇の中の登場人物のようなところがある。

スキ

ような生き方

伊東 孝之



いとう たかゆき

1941年、三重県生まれ。東京大学大学院社会学研究科修了(国際学修士)。北海道大学、早稲田大学教授を歴任。北海道大学、早稲田大学名誉教授。専門は国際関係論、比較政治学、ポーランドを中心とした東欧地域研究。

ポーランドでは珍しい完璧主義者であった。戦場においても平時の職場においても鬼のような仕事人間で、部下泣かせであった。戒厳令を布く前の1週間はほとんど自宅に戻らず、執務室の隣で寝起きした。国民に対して苛酷な命令をつぎつぎと発した。マキアヴェッリが「君主は民から愛されるのではなく、恐れられるべきである」と言っているが、戒厳令時代のヤルゼルスキはまさにマキアヴェッリの君主を地で行った感がある。

しかし、仕事を離れると、意外に優しい人間であった。「政治を離れると、ヤルゼルスキはまったく別人だった」とワレサは語っている。「ゆるゆるとして、親しみの



ヤルゼルスキの娘モニカ(2014)

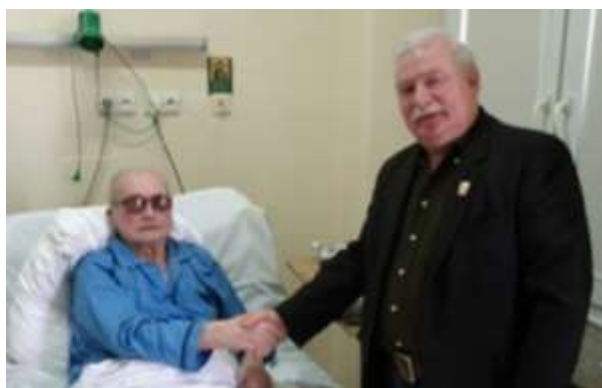
の持てる、とても知的な人だった。私にはあの時代のイメージとどうしても合わないのだ。」実は仕事においてもなかなかの教養人、文人であった。とくに演説

の文章に凝った。たったの数行にこだわって、何十回も書きなおし、書きなおさせた。そのためにヤルゼルスキの文章は共産党指導者のものとは思えないほど格調が高く、教養に溢れ、知的なアピールがあった。立ち居振る舞いにもエレガントさがあった。舞台に登場するときよりもむしろ舞台を去るとき姿が人々に印象を残した。位人臣を極めたながら、生涯その暮らしぶりは質素であった。本人だけではなく、妻もシベリアから戻った母親も妹も驚くほど質素な生涯を送った。

しかし、ヤルゼルスキのままにならないものがあった。それは娘のモニカであった。モニカは一人娘で、

父親が大嫌いだった。無理もない、仕事人間で自宅に帰ることがほとんどない日々もあった。戒厳令が実施された年に大学に入るはずだったが、なぜか大学に行くことを拒んだ。モニカがつきあった仲間には、反対派の知識人や『連帯』運動の活動家が多かった。1983年には自殺未遂事件を起こした。モニカが選んだのは無骨な父親からは想像できないようなファッション・デザイナーの仕事だった。毎号のようにその姿がファッション誌を飾るようになったが、歳をとるにつれその顔はますます父親とそっくりになってきた。2013年に『同志乙女』を世に問い、ベストセラーとなった。1年後には『家族』を発表した。いずれも自伝的な、ヤルゼルスキ家の物語である。父親が死んだ今、モニカはどう感じているだろうか。

死の13日前、ヤルゼルスキは突然神父を呼んでカトリックに入信したいと告げた。それはけっして衰弱した老人の、朦朧とした中での決断ではなく、意識的な、自由な決断であった。無神論者であり続けたヤルゼルスキはカトリック教徒として死んだ。葬儀はカトリック教会で行われ、カトリック教徒のワレサも臨席することに応じた。



ヤルゼルスキの病床を見舞うワレサ

2014年6月23日(月)北海道大学スラブ・ユーラシア研究センターにて伊東孝之氏の講演「政治変動と国際環境—ポーランド(1943-48年)とウクライナ(2013-14年)」が行なわれ、本会会員有志が聴講しました。

変わりゆくポーランド、 変わらぬポーランド

～日本ポーランド協会
関西センターの活動から～



藤井 和夫

ご承知のように、最近のポーランドは大きく変わりつつあります。今年(2014年)は、1989年の体制転換から25周年、NATO加盟から15周年、EU加盟から10周年という記念の年ですが、ポーランドはまさに激動の四半世紀を過ごしてきました。皆様の北海道ポーランド文化協会と同様に、日本ポーランド協会関西センターもずいぶん昔から活動してきましたので、この激動のポーランドとともに長い時間を共有してきたこととなります。

関西センターは、1970年代から民間の国際友好団体として発足した日本ポーランド協会のいくつか存在した支部(センター)のひとつとして誕生しました。当時はポーランドの政治情勢が世界中の注目を集めていて、1980年前後の自主管理労組「連帯」の動きやその後の「戒厳令」、1989年の「円卓会議」に続く初の自由選挙をきっかけとする社会主義政権の崩壊など、日本でもポーランドのできごとがニュースのトップを飾ることも多い時代でした。

しかしながら、1989年に体制転換して以降「ショック療法」が移行期の経済改革として注目されたあとは、なぜか日本のマスコミがポーランドのニュースを取り上げることは目に見えて減っていきました。ポーラ

ふじい かずお

1950年、兵庫県生まれ。関西学院大学経済学部卒、同大学院修了(経済学博士)。1978～80年ポーランドに留学。現在、同大学経済学部教授。専門はポーランド経済史・経営史。日本ポーランド協会関西センター代表。

ンド国内では不安定な政治と低迷する経済を安定したものにさせるための試行錯誤が文字通り必死で行われていたのに、日本にはポーランドの情勢がほとんど伝わってこない状況だったのです。

ちょうどその頃、日本ポーランド協会の東京本部が活動を停止し、各地域センターがそれぞれ独立して活動を継続することになりました。もともと日本ポーランド協会は「日本とポーランドの両国民の間の相互理解と友好親善に寄与することを目的とする」(規約より)民間の団体でした。関西センターはその目的をそのまま引き継ぎ、名称も(いろいろ議論はしましたが)以前の長つたらしい名前を今も使っています。会員はポーランドに関心を持つ多様な人々、大学や高校の先生、ポーランドに留学した経験を持つピアニスト、会社員、主婦、学生などからなり、1990年代から倍以上に増えて、現在の会員数は約120人になります。

関西センターが独立した活動を始めた時期が日本にポーランドのニュースがあまり伝えられなくなった頃でしたので、文化や社会を中心ととにかくポーランドのことを日本の皆さんに知っていただくことが、活動の一つの基本方針となりました。一例が数年おきに開いたシンポジウムで、1999年には「移行期ポーランドの光と陰」として体制転換から10年間の動きを紹介し、2002年には「ポーランドの貴族とその社会」という題で旧社会主義時代にはあまり注目されなかったポ



写真1 総会風景

ーランドの貴族社会とその文化を紹介し、2003 年には「第 2 次世界大戦とポーランド」でポーランドがいかに第 2 次大戦と深い関係があるかをその多様な側面とともに紹介し、2007 年には「EU 加盟後のポーランド」と題して、ポーランドと EU の文化的・経済的なつながりや加盟後の国内政治の動向を紹介しました。

実はシンポジウムはその後途絶えています。休眠には、企画や準備の余裕がなくなったこと以外にも理由があります。その一つは、一部の会員から「シンポジウムのテーマが暗すぎる」「話が難しすぎる」という声があがったことです。関西センターの特徴の一つは、ポーランドの専門家や研究者ではない会員の数が多く、それらの人々への情報の提供や交流を大切にしていることで、シンポジウムのテーマや内容が少し専門的になりすぎていたかと反省したわけです。さらに「ポーランドについて暗い話が多い」という指摘は、もっとも気になる点でした。「明るく、楽しく、美しいポーランドを紹介したい」というのは、大使館や観光局だけではなく、ポーランドの人々、そして私たちの願いでもあります。

それに、専門研究者によるポーランドの紹介は、その人のポーランド像が変化していないことがままあります。私がおの典型で、今年の初夏に 1978 年の留学以来長いつきあいのウッジの町を訪れ、腰を抜かすほどびっくりしました。ワルシャワや他の町にどんどんビルが建っても、ウッジは昔と変わらぬ姿の中に 19 世紀の産業的繁栄の栄光を見いだすだけの、時代に取り残されていく町、そう思い込んでいたのですが、その雰囲気象徴であったウッジ・ファブリチュナ駅周辺で 100 ヘクタールにわたる大規模再開発が始ま

り、地下駅の大工事の横にはすでにSF映画の未来都市のようなビルが一部にできあがっているのです。

今やインターネットの時代で、ポーランドについての新しい情報もどんどん提供されています。日本からポーランドへの旅行者も大幅に増え、メディアでも「明るく、楽しく、美しいポーランド」の情報があふれています。今は、「変わらぬポーランド」の情報発信がもつ別の意味を考えるべき時なのでしょう。

2002 年と 2006 年に関西センターで企画したポーランド旅行や、2003 年から始めたポーランド人留学生への支援活動も、変わりゆくポーランドを実感する機会となりました。留学生にはささやかな補助の代わりに、講演や隔週のポーランド語勉強会で講師役を行ってもらい、多様なテーマの彼らの話が、今時の変わりゆくポーランドそのままなのです。

関西センターは、「変わりゆくポーランド」を伝えるつもりで「変わらぬポーランド」を発信しないように気をつけながら、定番の料理講習会=写真2=やコンサート=写真3=を会員の協力で盛り上げ、編集者の努力で多彩な記事を集める会報誌『関西版ヴィスワ』をより充実させ、これからも時代に意味を持つ企画をたてていきたいと考えています。さらに「変わりゆくポーランド」に対して「変わらない関西センター」にならないように、組織の若返りも考えています。今後ともどうぞよろしく願いいたします。

日本ポーランド協会関西センター関連サイト

<http://www.eonet.ne.jp/~nippon-kansai/>
<http://nippokansai.blog.fc2.com/>



写真 2 料理講習会



写真 3 コンサート

藤井先生ご一家には、私どもが 1994-95 年に(阪神・淡路大震災のときでした)ワルシャワで暮らした折り、日本人学校などでたいへんお世話になりました。そのご縁で、今回関西での活動についてご寄稿いただきました。(安藤厚)

《できごと》

コザチェフスキ大使 札幌で講演



6月18日、ツィリル・コザチェフスキ駐日ポーランド共和国大使が札幌で2つの講演を行いました。

北海道大学スラブ・ユーラシア研究センターでは=写真1=「ポーランドの地政学的重要性について」と題して主に専門家を対象とした英語の講演、「グループりら」(細川真理子代表)では=写真2=ポーランドの政治、経済、文化について一般市民向けのスライドを交えたお話をを行い、本会会員有志も聴講しました。

日帰りで午後と夜に2回の講演というハードスケジュールでしたが、大使はその成果に大変ご満足の様子で、夜の講演の冒頭で「就任以来あまりにも頻繁に札幌に来ているので、何回目か数えるのは、もうやめました」と冗談交りに語ったのが印象的でした。

(佐光伸一、写真:尾形芳秀)

写真2「グループりら」での講演には多数の市民が参加しました

写真1(左)大使と(右)北大スラブ・ユーラシア研究センター田畑伸一郎教授



今秋の本会《後援》の催し

※ 詳しくは同封のフライヤーをご覧ください



さっぽろオペラ祭 2014
北海道二期会創立 50 周年記念
オペラ「ショパン」
2014年10月12日～13日(日～月)
札幌市教育文化会館小ホール



遠藤郁子デビュー50周年記念
ピアノリサイタル
「北海道～パリ～そしてポーランド」
2014年11月8日(土)
札幌コンサートホール Kitara 小ホール

ポーランドで生まれたアートマイムの祭典

“サイレンス・オブ・ザ・ボディー” Milczenie Ciała” 日本公演

児真 順子

ポーランドのマイムアーティスト、ステファン・ニジャウコフスキがカンパニーメンバーと共に初来日し、アートマイムの祭典“サイレンス・オブ・ザ・ボディー/Milczenie Ciała”が11月7日～10日、東京・両国のシアターX(カイ)にて開催されます。

ニジャウコフスキは2004年にポーランド共和国大統領よりポーランド金の十字架勲章“Złoty Krzyż Zasługi”を、今年5月には文化・国家遺産省大臣より「文化功労章グロリア・アルティス(芸術栄誉)」銀メダルを授与されました。



写真1 “震える身体/ Drzące Ciało”

ポーランドの演劇といえばイェジー・グロトフスキやタデウシュ・カントルなどが思い浮かびますが、同時代にポーランド演劇界、マイム界を語る上で欠かせないヘンリク・トマシェフスキ(1919-2001)がいます。彼のマイムは、ダンスや演劇という分野だけでは尽くせない表現を追求した結果生まれ、他国との芸術的交流も容易でなかった時代背景から、一般的に知られているフランスやイタリアのマイムの影響はほとんど受けませんでした。

今回来日するステファン・ニジャウコフスキは、トマシェフスキ主宰「ブロッツワフ・パントマイム・シアター」のトップスターの一人でした。退団後はワルシャワを経てニューヨークへ渡り、フランスのマイムが主流だった当時、ポーランド人のマイムアーティストとしてマイム学院や劇団を設立し、世界中を公演し、心や精神、感情や感覚を身体に映し出す普遍的な芸術としてのマイムを創り上げました。

このマイムは、一般に知られているジェスチャー的なテクニックを見せるものとは全く異なり、人間性やそ

こま じゅんこ (写真1:右;写真2:左端)

3歳よりクラシックバレエを始める。マイムをステファン・ニジャウコフスキの右腕でもあったテリー・プレスに、その後ニジャウコフスキに師事、現在は同氏主宰マイムアートシアター(ワルシャワ)に所属。

の存在、人間を通して感じられる世界を表現し、身体を媒体として、個を超えた普遍的な表現を最も重視するもので、身体表現の土台であると同時に、人間を扱うあらゆる分野に通じる根源にも繋がっています。ポーランド語の“Milczenie”は、沈黙、または深い知恵を悟ることで分かる精神的な静けさを表しますが、ニジャウコフスキは、マイムとはこの領域でのコミュニケーションであり、人間の賜物として最も大切なものと考え、著書『マイムの世界/Swiat Mimów』で「マイムはただ言葉を発しないのではなく、言葉を超越して存在しなければならない。そして言葉になる前に浮ぶ静けさは何にも勝り、それは永遠に続く」と書いています。



写真2 “スピリット・オブ・サウンド/ Duch Dźwięku”

今回の催しは、全世界のいかなるものとも比較できない独特な芸術的試みで、公演、講習会、アートカンファレンスなどを通じて、「沈黙の演者の芸術」の考察と習得にフォーカスが当てられています。ポーランドで生まれたこの崇高なマイムをぜひ鑑賞し、沈黙のコミュニケーションを経験して何かを感じ取っていただけたらと思います。詳しくは、以下をご覧ください。

<https://www.facebook.com/j.artmime/>

今後の活動予定

〈第70回例会〉ヤン・カルスキ生誕100周年記念
展示会「私はホロコーストを見た——ヤン・カル
スキの黙殺された証言」

日時：10月27日(月)～11月9日(日)
(月～土)8時45分(初日は12時)～22時
(日・祝)8時45分～20時(最終日は16時)

場所：札幌エルプラザ 2F交流広場
(北区北8西3、JR札幌駅北口地下歩道
12番出口直結)

内容：ポスター(写真と解説)等
※同封のフライヤーをご覧ください



〈第28回定例総会&懇親会〉

日時：10月31日(金)
18時30分(懇親会 19時30分～)

場所：北海道大学クラーク会館 3F
国際文化交流活動室

懇親会会費：3000円(予定)



新会員をご紹介します

大塚広介さん、古屋郁子さん(2名)

ご寄付ありがとうございます

感謝をもってご芳名を掲載いたします。
佐藤宣子(3)

※()内は口数:1口千円、敬称略

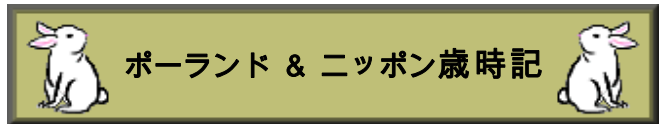
《重要》年会費納入のお願い

10月から新年度を迎えます。
2014年10月～2015年9月分の年会費(3000円、
学生1500円)、および維持会費(任意のご寄付:1
口1000円以上)の納入をお願いします。
本会の活動は皆様の会費とご寄付により賄われて
います。ご理解とご支持をお願いします。

【郵便振替口座】02740-5-19735

【名義】北海道ポーランド文化協会

※事務効率化のため、送金はできるだけ郵便局のATM
扱い(手数料は無料)をお願いします。



ポーランド & ニッポン歳時記



太陽へ向くヒマワリの偽善かな

(ヒマワリ・夏七月)

門火には大悪人の虚子も来る

(門火・秋八月)

出棺に閻魔蟋蟀飛び出すや

(コオロギ・秋九月)

千代麿

〈岩見沢市在住。霜田千代麿さん〉

1992年より作句する。伝統俳句協会会員。現代俳句協
会会員。北海道俳句協会選者。「夏至」同人。

ミントの香る家…

私たちの今年の夏は、ハーブの季節となりました。
鉢植えのミントがその香りで心を和ませてくれて
います。周囲には、家庭菜園でハーブを栽培して
いる人がいれば、ベランダや窓際で
育てている人もいます。我が家では、
例年のごとく、花も植えています。
ハーブも美しさも奥が深いです。



wieczór po deszczu

ペチュニアの

cichą przestrzeń spowija

静かな甘み

słodycz petunia

雨の後

〈ポズナン市在住。津田モニカさん〉

日本文学研究者。2008年から俳句を詠む。「日常の
中の水彩画」のような句を目指す。

北海道ポーランド文化協会会誌

POLE 第 83 号 (2014 年 9 月)

目 次

[第 28 回 2014-2015 年度] 総会&懇親会 [2014.10.31] にお越してください!	1
〈第 70 回例会〉ヤン・カルスキ生誕 100 周年記念展示会「私はホロコーストを見た」in 札幌 [2014.10.27-11.9] [案内]	2
はじめての東京例会大成功! 尾形芳秀 〈[第 69 回] 東京例会講演要旨〉「樺太時代に生きたポー ランド人~彼らはどこから来て、いかに生き、どこへ帰ったのか」 [2014.6.28]	3
〈第 68 回例会報告〉 [2014.6.14] 佐藤宣子「朗読会 [第 4 回午後のポエジア] に出席して~巡 り合わせ」	6
アグニェシュカ・ポヒワ 〈北海道のポーランド人から〉「誓います/ Przysięgam~日本とポー ランドの結婚式について (1)」	8
栗原成郎 〈都市の伝説~トルン 2〉「筏師と蛙たち」	9
伊東孝之「社会主義時代の最後の独裁者ヤルゼルスキ~ギリシャ悲劇の登場人物のような生 き方」	10
藤井和夫「変わるポーランド、変わらぬポーランド~日本ポーランド協会関西センターの活 動から」	12
佐光伸一「コザチェフスキ大使札幌で講演」/ 今秋の本会 〈後援〉 の催し: さっぽろオペラ 祭 2014・北海道二期会創立 50 周年記念オペラ「ショパン」 [2014.10.12-13]、遠藤郁子デ ビュー 50 周年記念ピアノリサイタル「北海道~パリ~そしてポーランド」 [2014.11.8] ...	14
〈協力事業〉 児真順子「ポーランドで生まれたアートマイムの祭典“サイレンス・オブ・ザ・ ボディー / Milczące Ciało”日本公演」 [2014.11.7-10]	15
霜田千代麿・津田モニカ 〈ポーランド&ニッポン歳時記〉 / [事務局より] 今後の活動予定: ヤン・カルスキ生誕 100 周年記念展示会「私はホロコーストを見たーヤン・カルスキの 黙殺された証言」、〈第 28 回〉 定例総会&懇親会	16